

歴史文化館ニュース 第4号

2010.12.6

様々な取り組みが進んでいます

椋山歴史文化館 館長 椋山美恵子

5月から「文化展示室」の企画展として開催されていた「同窓会作品展」は、好評のうちに10月中旬その幕を閉じました。出品された皆様、そしてお世話をいただいた同窓会関係の皆様のご協力に心よりお礼申し上げます。11月10日からは新たに「教職員作品展」を開催しています。これまた多くの皆様にご協力いただき、専門の方々の作品から趣味の作品まで多彩で魅力的な作品展となっています。

6月中旬から始まった「雛形研究会」はすでに10回ほどの研究会を持ち、毎回午前10時頃から午後4時頃まで精力的に資料の整理・研究が進められ、基本的な分類はほぼ終了し台帳の作成に取り掛かっています。今後の参考のために11月には研究会メンバー4人が東京家政大学の特別企画展「裁縫・雛形コレクション」を訪れました。

また「自校史」教育の企画の一環として、椋山女学園の教育理念に関する「資料集」を現在作成中です（冊子発行は来年度予定）。

さらに上記の「資料集」を含め、当館所蔵資料等のデジタルアーカイブ化を計画しており、今着々と準備が進行中です。

椋山歴史文化館の今後の課題は多くありますが、一歩一歩取り組みが進んでいます。



教職員作品展

開催期間 平成22年11月10日(水)～平成23年2月26日(土)

場 所 椋山歴史文化館文化展示室(大学図書館4階)

開館日 水曜日 10:00～16:00 / 土曜日 10:00～18:00

出品者名(五十音順) 青木貴美江、Shirayama, Yuriko、西宮、高橋裕司、大庭、益、太田孝次夫、小倉淳子、加藤元子、桑山、松三、島田隆明、椋山、庄弘、田中妙典、境、光星、澤、藤原、戸部、一、豊田、典、中村太貴生、西原洋一郎、馬名エレーヌ、横、正史、村上、心



第4回企画展「教職員作品展」開催



平成22年11月10日(水)から平成23年2月26日(土)の会期で椋山女学園の教職員作品展を開催しています。

現・旧教職員21名の方から43点(書4点、絵画4点、陶芸3点、写真6点、手芸6点、アクセサリ18点、染め1点、照明器具1点)の作品が出品されています。

いずれも力作揃いであり、それぞれの部門で日頃から活躍されている方の作品が展示されています。写真部門では椋山オープンカレッジの写真塾出身者による作品もあります。

展示会場では、製作者のコメントを添えたキャプション(説明板)が、より一層作品の趣を感じさせてくれます。

この機会に椋山女学園教職員の多才ぶりをご覧ください。

< 手作りの「梶小の歴史」 >

この秋、梶山小学校の廊下の壁に新しく「梶小の歴史」が作られました。その壁は校長室・職員室の前にあって、児童はもちろん父母も来客も誰もが通る一番よい場所にあります。教師の手作りで小学校にふさわしく楽しく温かみのある一覧になっていて、歴史を簡潔に分かりやすく辿ることができます。学校の歴史を、自分が生まれた年や父母や祖父母などが生まれた年など対比して見ながら、自分が今ここに居ることの意味を考えることができる場となりました。反対側の壁には児童の活動が紹介されていて、廊下全体が梶小の昔と今を語る魅力的な廊下になっています。



< 来館者が語る梶山での戦争の時代 >



本館の歴史展示室には「戦争・学徒動員」の展示ケースがあります。そこには当時実際に使われていた「学徒戦時奉公隊腕章」や、学園が戦後県に提出した「学徒動員に伴う死亡報告」や、爆死した学徒動員の級友と恩師に捧げる「追憶の書」など多くの資料があります。

過日昭和2年生まれの卒業生(梶山女子商業学校)久野静子さんがご家族とともに来館され、展示物を見ながらご自身の体験を語ってくださいました。以下に概略を紹介します。

「・・・戦争のため修学旅行は取りやめになり卒業も3ヶ月の繰り上げ卒業だった。在学中は「梶山隊」という名前で三菱重工航空機の工場

で3年ほど働いた。飛行機を作っていた工場であったため米軍のB29 から集中的に攻撃を受け、その際には三菱の防空壕に逃げていた。あまりの激しい空襲のため近くの大江橋を渡って道徳にあった倉庫に逃げたこともあった。空襲が収まると疎開先の横須賀(東海市)まで歩いて帰った。また飛行場で女子挺身隊として怪我をした兵隊の受付や、病院へ運ばれる死体や重病の人々の名前や住所を衣服の名札で確認し書き取る手伝いもした。昭和20年の8月15日急に全員が集められ「12時のラジオ放送」を聞いた。その場には兵隊も整備兵も女子挺身隊もいた。敗戦そして終戦を知らされると皆泣き、中には切腹すると言い出した人もいた。皆アメリカ人がやって来て殺されるのだと思っていた。終戦から暫く経ち、満州に行っていた兄が帰ってきた・・・」

いろいろな歴史資料に興味深くご覧になり思い出は尽きないというご様子でした。スタッフ一同、改めて戦争について考える機会となりました。

【正式記念室トピックス】

< レシピ帳 >

正式記念室の陳列棚の中には創設者・正式氏、今子氏が実際に使っていた眼鏡や財布、櫛、裁縫用コテといったものから戦時中に発行された国庫債券に至るまで生活で使われていたものがそのままの形で展示してあります。それらの中に今子氏の料理のレシピ帳があります。レシピ帳と言っても、「50円で家族3人のお献立」「今週のおこんだて」といった新聞の切り抜きや「うどんのホワイトソース煮」などの手書きレシピなど様々です。

第2次世界大戦後は洋食が家庭料理として広く浸透し、今子氏のレシピ帳も肉シチュー(ビーフシチュー)やグラタン、ハムライスといった洋食のメニューが多く、正式氏、今子氏が和やかに食卓を囲む家族団欒の様子が目に浮かびます。



<渡辺学園「裁縫雛形コレクション」(重要有形民俗文化財指定10周年記念特別企画展) 見聞記>

雛形研究会 中保 淑子



表題の展覧会は東京都板橋区に位置する東京家政大学博物館で10月から11月にかけて開催されていました。渡辺学園は本学園創設者梶山正弼氏の出身学舎であり、梶山歴史文化館に展示されている「雛形」資料のルーツとも言える存在です。企画展は、東京家政大学創立百周年記念館の5階、博物館事務室、収蔵庫などに隣接した3教室分はあると思われる広さの部屋で行われていました。衣服実物大展示が可能な高さの陳列ケース、腰高ケースが並び、その内には多数の雛形が配置よく並べられていました。和装では、女袴、着物の重ね、外衣、有職類。洋装では、下着、海水浴着、西洋前掛、紳士服、婦人服、学

生服・子ども服、職業服、外国服、改良服などです。壁面には、雛形に関する歴史や解説のポスターが貼られ、ビデオを備えて初心者への配慮がみられました。そして、本展の重要性は“明治30年頃から昭和18年までに製作された約4000点の雛形を収蔵しており、うち2200点が教科書や製作用具61点とともに、平成12年に国の重要有形民俗文化財に指定されました。本展は文化財指定10周年という節目の年に雛形の歴史的意義を見つめ直し、その存在を広く知って頂くとともに保存・活用を図りながら末永く後世へ伝えようとするものです”とありました。また、雛形の製作については、“雛形というのは、明治から昭和にかけて本学の教育課程の中で製作された衣服や生活用品等のミニチュア標本です。校祖渡邊辰五郎が明治7年頃考案した「雛形尺(ひながたざし)」という物差しを使って製作され、画期的な裁縫教授法として教育界の注目を集めました・・・”とあり、パンフレットには「雛形尺」と縮尺について、なぜ約3分の1なのか?と具体的に解説されていました。

午後から、三友晶子博物館学芸員より実際に雛形に携わってこられた方ならではの具体的注意点や心掛けのアドバイス等を頂きました。そして見学。常設展の紹介や雛形収蔵庫(20℃/50%)の現状説明をして頂きました。10段ほどが単位となっている底の浅い引出しは桐で出来ており、衣服資料は少しずつずらして並べられ、雛形のあるがままを保存することなどの教示を頂き大変勉強になりました。文化財指定分とその後の寄贈の物とは別に保管し、現在なお続いている裁縫雛形の寄贈分は個人別の記録と保管整理をしているとのことでした。

今回の訪問によって、雛形に対する知識・愛情が深まり、梶山卒業生への寄贈の呼びかけの必要性を感じた次第です。



【歴史の窓】

<小倉遊亀と梶山女学園>

小倉遊亀(旧姓溝上)は、上村松園とともに日本を代表する女流画家のひとりであり、明治28(1895)年3月1日、滋賀県大津市に生まれました。大正6(1917)年、奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大学)に入学し、ここで図画の教師であった横山常五郎に絵の指導を受けています。

遊亀は、大正8(1919)年5月から翌年3月まで、当時の梶山高等女学校に国語の教諭として着任しました。事実、在任中の大正9年版の卒業アルバムの教員写真(右写真)にその姿をとどめています。1年足らずの短い間でしたが、授業だけではなく「校友会」の役員として雑誌部の部長を務め、『糸菊』大正8年号の編集および発行の代表者として奥付に名前を残しています。

その後、大正9(1920)年には、横浜の捜真女学校の教師となり、安田靫彦に師事し、大正15(1926)年には「胡瓜」が第13回院展に初入選しました。

戦後の小倉遊亀は、院展に優れた作品を次々に出品し、数々の受賞に輝いています。昭和55(1980)年には文化勲章を受章し、女流画家としては昭和23(1948)年の上村松園以来のことでした。

平成12(2000)年7月23日、105歳の長寿を全うして逝去しました。



前列左から3人目が小倉(溝上)遊亀

梶山歴史文化館とデジタルアーカイブ

人間関係学部 杉藤重信（専門委員）

梶山歴史文化館は、発足以来まだ時間を経ないが、その前史をふまえた上で、資料保存展示の手法として、今後のデジタルアーカイブ化の可能性と必要性について触れてみたい。

まず、ことの発端は1998年暮れであった。学園資料室に学園史に関わる資料があるが見ないかという学園事務局総務課からの非公式な打診があった。学園資料室担当の松井康太郎先生（当時・学園参与）のお手を煩わせて、資料室を見せていただくことになった。梶山正弘理事長（当時・学園学術顧問）にもご参加いただいた。

資料というのは、もともと山添キャンパスで保管されていた金属製の衣料ケース4箱のなかに、ぎっしりと詰められた「雛形」のことであった。松井先生には、「雛形」だけではなく、やはり卒業生から贈られた教科書や授業用のノートや日記もご用意くださっていた。その中に学園創設者の梶山正式先生と今子先生のご共著になる教科書『衣服裁方図解』も含まれていた。「雛形」はこの教科書に記載された型紙を用いて製作されたもので、実寸の三分の一の縮小サイズで実寸と同様に縫製することにより、体系的実証的に衣服の縫製方法を習得するというものであった。

今更いうまでもないが、本学園は、明治38年、名古屋市東区富士塚町の武家屋敷跡に「名古屋裁縫女学校」開校されたことに始まる。日露戦争のさなかであった。創設者の梶山正式氏は、女子教育に志を立て、東京裁縫女学校（東京家政大学の前身）に入学された。そこで裁縫技術と教育方法を学ばれたのであった。そして、同級の中村今子氏と出会い、ご結婚、お二人で「名古屋裁縫女学校」を創設されたのであった。先述の教科書も、お二人が東京で学ばれた教授法の成果であった（注1）。

その後、1999年5月に岐阜県民ふれあい会館に、お母様が本学園同窓生であったという女性の方の雛形のコレクション（写真を含む）を拝見するために、梶山正弘先生、故梶山藤子先生（正弘先生のご母堂、本学家政学部名誉教授）におともして出かけ、お話を聞かせていただいた。このコレクションにヒントを得て、雛形を現物保存だけではなく、画像としても保存することの必要を感じ、同じ年の7月には、学園資料室に、藤子先生に再びおいでいただいて、中保淑子先生（当時・生活科学部教授、現・本学生活科学部名誉教授）とともに、藤子先生のお心積もりをお聞かせいただきながら、奥村写真館に「雛形」の写真撮影を待った。

その折、話題となったのは、「雛形」を初めとする梶山女学園の歴史遺産をどのように保存して後に伝えるか、また、資料の所在調査の必要、歴史資料としての16mmフィルムの保存、卒業写真やアルバム類の保存など、また、資料の保存場所の発見と点検などについて話し合われた。当時進行しつつあった100周年記念事業と関連させることができないものかということも話し合われた。その後、藤子先生や生活科学部の中保淑子先生によって「雛形」の標本名が教科書との照合によってあきらかになり、アイロンがけや防臭処理の後、キャビネットに収納されることになった。

残念ながら、100周年記念事業として、学園資料室の拡大充実のプロジェクトは潰れたのだが、せめて、ウェブページでの「バーチャル展示」ができないものかと考えた。すでに1999年3月に、仮の「学園資料室ホームページ」を立ち上げており、これを拡充しようというもくろみであった。2004年に学園研究費をいただき、「雛形」のいくつ

かの撮影を大日本印刷に依頼し、バーチャル展示への一步を踏み出したのだが、筆者の怠慢と他の業務に取り紛れてしまった。

幸い昨年（2009年）6月、学園資料室は、「梶山歴史文化館」として新たな一步を踏み出し、資料室に収蔵されていた資料だけではなく、正式先生と今子先生の遺された個人資料も含めて保存展示されることとなった。また、筆者にも、梶山歴史文化館専門委員会委員になるようにとのお声掛けをいただき、再び学園資料にかかわる機会をお与えいただいた。かつての経験を踏まえ、第一回委員会の際、僭越にも申し上げたことは、現物資料は今後、増え続けることが予想され、収蔵庫の収容能力の問題、また、展示室の現状サイズからして、近い将来、明らかに限界が生じるので、この対策をまず立てるべきことを申し上げた。

それは、こういうことである。おそらく、物理的空間の制限がある場合に、非常に有効な対処法はデジタル化である。たとえば、貴重な資料であれば、精緻な精度でデジタル化を行うことができれば、直接に資料に触れる回数を減らして損傷の可能性を最小限にすることができよう。また、損傷を完全に防ぐにはコストの点でも無理があるとするならば、デジタル資料として恒久的に保存することも可能である。さらに、デジタル化された資料についてネットワークを通じて公開することは、容易であり、その場合、展示スペースはほぼ無限といつてよいだろう。

筆者が1999年に思いついた「バーチャル展示」というのは、単に、デジタル写真をならべて資料に添付されている記述情報を添えると言う程度のレベルでしかない。しかし、「梶山歴史文化館」の役割と機能としてあらためて考えてみると、所蔵資料カタログについてデジタル化を進め、その際、単に、所蔵情報のみを記録するにとどまらず、デジタル画像も含めて「積み上げて行くこと（デジタルアーカイブ）」は重要（注2）であり、インターネットを通じた公開性の確保もまたきわめて重要であるということができよう。

新しく誕生した梶山歴史文化館の役割と意義とは、あえて、誤解を恐れず述べるとすれば、これまでの学園の歴史についての資料の蓄積を通じたコアアイデンティティの記録と教育の場であり、同時に梶山女学園の歴史と現代をネットワークを通じて発信する場であるといえよう。そうした中でデジタルアーカイブの意義はますます大きいはずである。

注1: このあたりのいきさつについては、以下を参照。杉藤重信、2000、「巻頭言」「BSM5」（Bulletin of Sugiyama Museology）

注2: 影山幸一、2004、「デジタルアーカイブという言葉を生んだ「月尾嘉男」」、DNP: "artscape 2004.01.15"、
http://www.dnp.co.jp/artscape/artreport/it/k_0401.html
(index: <http://www.dnp.co.jp/artscape/index040115.html>)

歴史文化館ニュース 第4号

発行日 2010（平成22）年12月6日

編集・発行 梶山歴史文化館

名古屋市千種区星が丘元町17番3号
TEL 052（781）1186（代）

編集担当者 梶山美恵子 村瀬 輝恭 大浦 詔子
河路 峰雄

